会員の広場

# 「F. M. Exner 著 Dynamische Meteorologie」翻訳後日譚

20世紀も終末に近づいている今日，戦争中の事など知っている人も少なく，知っておっても関心をもっている人もあまり無いと思うが，小生東北大学に在職中，地震学者である教授から，戦争遂行の一助にもと思われたのか Wien 大学教授 F. M. Exner の Dynamische Meteorologie 415頁の全訳出版を奨められ浅学菲才を顧みず承諾した．これは1925年の出版であるが，私の推測するに当時洋書の輸入は今日程容易でなかったにもかかわらず名著だったためか各大学はもとより個人としても所有する人が多かったと想像され私も同教授から拝借した．昭和19年といえば生活環境は極めて劣悪であった上，陸軍将校に協力して体感温度零下35°Cの蔵王山頂で航空機の翼に氷の付着する研究に従事していた．やっと翻訳を終えたのが昭和20年初頭，それから数回の校正を経てやっと製本に取りかかった．ところが次第に空襲が激しくなり，3月10日の東京大空襲には幸い無事であったが遂に4月下旬の空襲で製本屋において焼失した事が出版元の恒星社の主人から教授のもとへ連絡，一時は呆然としたものの当時すでに厭戦気分は漂うし政府は国民には秘密裡に休戦の交渉を模索していると云う噂が巷にちらほらする中，焼けても何でもよいから早く終ればそれで良いとの気力しかなくそれきりになってしまった．ただ，教授から出版物検閲の為どこかに一冊見本としてあるらしいといわれた．

以来50年以上経った昨年6月そろそろ身辺整理と思い物置を片付けていたところ，埃を被った一塊の紙の束を発見，何とそれが所々赤字の跡の残る最終校正であった．既に公職も離れ全くの隠居の身であるので出版したら？と考えたが70年以上も昔の本を翻訳したところで何の価値があるだろう．日進月歩の電子の世の中，コンピューター全盛の時代，専門家から散々叩かれるのが関の山位だろうと危惧したが歴史的価値位はあるだろうと思い岩波 BSC に持込んだところ，快く承諾，ところが先方の申すには活字が大き過ぎる．旧漢字は皆改める（氣を気，等）仮名使いを今風にする（ゐをい，等）．更に図は103枚皆不鮮明なので皆書き直す，各頁の下の脚註は各章の最終頁にひとまとめにする等々多数．一方こちらの方針は，力学は数式が重要であるから校正には最も注意を払い，かつ昔よく用いられた「而して」とか「然るに」等はそれなりの独自の意味をもっているのでそのままにしておく，また近頃流行している「ら抜き言葉」は極力避ける．また「ないんじゃないかと思う」など否定の否定は避ける．カバーは岩波が作製し，図は2つの提案から1つを私が選んだ．ヨーロッパ人の民族性の然らしむるところというべきか文章の読み易いのは良いが我々日本人には如何にも冗漫の嫌いがあるのは否めない．併し著者は科学的論拠を失わずに読者に説明していると思われるので訳者としても日本語的美文などにはこだわらないように心がけた．書中には Bjerknes, Defant, Richardson などの名が出ているが，それと並んで岡田武松，藤原咲平両先生がしばしば登場する．70年も前に両先生が世界の注目する大研究を成しとげていられることを示すもので今更ながら両先生の功績を偲ぶことができる．なお，原書中の頁番と訳書の頁番の照合は正確を期したつもりである．最近国内の著名な学者から James Rodger Fleming の編集した Historical Essays on Meteorology 1919〜1995を頂戴した．それに依ると最近の数値予報の先駆者はさかのぼればノールウェイ学派の V. Bjerknes であることは論をまたないが，同時に Exner は永く忘れ去られていたが今日再認識されるに至ったと書いてある．要するに彼は既に天気予報における上空の気象の重要性に着目していたというべきであろう．なお，本邦では以前からすでに正野重方博士訳出のエルテル著「気象力学の方法と問題」があることを同学の士から紹介されたので御参考までに．

最後に，山元龍三郎博士並びに駒林誠博士から種々有益なる事柄を教示して頂いた事に感謝の意を表してこの投稿を終る．

なお，本訳書は主な国公私立大学，研究所，全国都道府県立及び数市の市立各図書館に寄贈した事，及び近々天文月報に著名な天文学者が本訳書の書評を載せるが，その中に天文学と気象学の関連を論じられており極めて格調の高い論評である事を申添える．

（佐藤隆夫）

© 1998 日本気象学会